

マレーシアにおける狂信的イスラーム運動 I (1970～80年代)

中 澤 政 樹

はじめに

マレーシアにおいては、民族暴動¹⁾以降の1970年代に、さまざまな形でイスラームの再興や活性化の運動、いわゆるマレー語でダッワー(*dakwah*)²⁾と呼ばれる運動が盛んにその活動を展開し、拡大してきた。この運動の源流は、概ね植民地時代の民族主義独立運動にまで遡る。その系譜を引き継ぎ、今日の運動は、多民族の複雑な社会関係に基づく(主としてマレー側から見た)政治・経済・文化の諸問題を背景に、全般に単なる宗教運動の枠を超え、社会・政治運動化する傾向を強く示している。本研究は、そのような運動の中でも、極端に急進的(*radical*)かつ狂信的(*fanatic*)な思想・姿勢を持ち、それ故に多くの場合逸脱的(ある意味で犯罪的)な行為あるいは事件として処理されてきた運動を取り上げる。

本論に入る前に、本研究の資料上の問題について簡単に触れる。以下に詳述する通り、狂信的なイスラーム小教団の諸活動に関するデータの入手は、方法論的および所与の政治環境の制約のために、極めて難しい。それ故に、本研究では、政府機関の情報や新聞・雑誌の記事などの二次資料に専ら依存せざるを得ない。しかも、その情報源であるマレーシア政府(連邦/州)自身が、この種の宗教団体の活動事情を正確には把握しているわけではなく、ましてや現地住民にいたっては、ほとんどのケースで、その存在すら知らないあるいは無関心であるというのが実情である。

マレーシアの場合、イスラーム宗教関係の行政は、原則として州政府の管轄となっている。これは、歴史的にマレーシア連邦独立以前より、マレー系の諸州はイスラームの世俗首長であるスルタン(*sultan*)によって統治されてきたという伝統に基づくもので、独立後もイスラームに関する事項は州法によって定められることになっている。各州には、その中央に宗教会議(*Majlis Agama Islam*)やイスラーム関係局(*Jabatan Hal Ehwal Agama Islam*)、郡部に宗教事務所兼裁判所(*Pejabat Agama*と*Makamah Syariah*)などの諸機関が行政上の問題を処理している。特に、州中央における宗教会議で、本研究に挙げられた狂信的教団の教えや活動に対する異端審問が行われ、法的解釈(*fatwa*)³⁾が発布され、宗教関係部局に保管された資料の中でその内容が確認でき

る。ただし、近年では、連邦政府の宗教関係諸機関(例えば、*Islamic Council*や*Islamic Research Centre*)がイスラーム行政、特にシャリヤー法の改正に積極的に関与するようになっている。多州に跨って広範に活動するダッワー教団については、むしろ州政府以上に連邦政府がより正確な情報を握っている。以下に取り上げたものの多くは、連邦の国内治安法 (ISA: *Internal Security Act*)⁴⁾により検挙された運動である。

I. 教団・運動の特徴

狂信的なイスラーム運動の多くは、その最終達成目標として、イスラーム復興運動⁵⁾全般に見られる「イスラーム国家 (*Islamic State*もしくは*Islamic Republic*)」の樹立を掲げていた。この目標がイスラーム神秘主義(*sufism*)及びマレー伝統文化の修身の行と習合し、正統教義から逸脱した異端解釈を生み出す一方で、その具体的活動はしばしば政治闘争と密接に絡み合い、政府転覆を意図した急進的な革命闘争グループへと発展してきた。以下に紹介するいずれの事例においても(特にその信者たちの間に)、社会的抑圧からの宗教的な救済(根本的な解放)に対する強い願望、ある意味で千年王国運動的な超越論的理念が、それらの運動を支える基本テーゼとして存在し、運動を激烈に突き動かしていたようだ。

イスラーム国家については、今日も、マレーシアのみならず、多くのムスリム人口を抱える諸国においてさまざまな議論がされている。マレーシアの場合、1957年の独立に際して、憲法の中でイスラームを国教とされ、さらに民族暴動を契機にその地位が再確認され、不可侵な条項として保障された。この事実をもって、すでにマレーシアはイスラーム国家であるとすることも可能である。しかし、現代のイスラーム復興運動が要求するイスラーム国家の形態は、単にイスラームを国教することだけにとどまらず、より積極的に社会制度や法体系全体をイスラーム化し、すなわちシャリヤー法(*syariah*)を忠実に遵守し、真のイスラームの信仰を回復した国家を指しており、例えばイランのように、ウラマー(*ulama*)によって統治され、神の教えが実現した神聖な国家を目指している。その結果、こうした思想はしばしば世俗国家の転覆という非常に過激な革命理念に発展し、狂信的な活動の論拠となってきた⁶⁾。

以上のことを踏まえ、本研究で取り上げる狂信的イスラーム教団には、さらに次に挙げる5つの特徴が指摘できる。

- ① 急進的な諸活動の核となるリーダーシップは、極めて強いカリスマ性を持っている。このカリスマ的リーダーは、しばしばマフディー(*mahdi*)⁷⁾、すなわちメシアを自称し、この概念をもって自らのリーダーシップ掌握の正当性を強化している。

- ② 運動の母体となる集団は、その規模が比較的小さく、非常に排他的性格が強い。さらに、この小集団は、カリスマ的リーダーを中心に組織的に統合され、参加者間の紐帯が非常に強い。教団活動において、その参加者は日常世界から遊離した、ある種のコムニタス的共同体を形成していると言える。

こうした集団的特徴は、マレーシアを含むイスラーム世界に広く存在する、伝統的な宗教結社タリーカッ (*tarikah*) に見られるものである。タリーカッは、「道」を意味するアラビア語を語源として、スーフイズムにおける特定の行者や聖者たちを中心に神秘道を究めるための恒常的な教団として組織された。神の存在を認識し、神との親密な関係を保持するための精神的な修養がその中心課題となり、その目的でしばしば呪術や苦行、集団的狂騒などが実践された。また、聖者らに奇跡を起こす力が信じられ、彼ら自身が崇拜の対象になる例もあった。全般に秘密結社的性格が強く、その実体に関しては不明な点が多い。マレー社会においても、タリーカッは、一般に正統教義から逸脱した教え (*ajaran sesat*) を実践する異端の徒の集まりとして捉えられていることが多い。マレーシアでは、現在も相当数のタリーカッが活動していると思われるが、その秘密主義的性格から、政府宗教関係機関すらその実体を十分に把握しきっていない。

- ③ 運動の基本理念 (イスラーム国家) を実現するための具体的な手段として、武力闘争／テロリズムを積極的に採用する。その際、聖戦 (*jihād*) と殉教 (*syahid*) の概念が、実際的手段行使を正当化する論理を構成している。

ジハードとは、元来「神の道 (イスラーム) のために努力すること」という意味で幅広く用いられてきた。ここから派生して、主としてイスラームの大義と共同体ウンマ (*ummah*) のために、強固な信仰心をもって、異教徒と戦うという狭い意味で用いられるようになった⁸⁾。そして、イスラームでは、この聖なる戦いでの死すなわち殉教に対しては、神の楽園 (*jannah*) が無条件に約束されている。この点で、殉教はムスリムにとって最も望ましい死の一つと了解されている。

ジハードの対象となるイスラーム大義への敵対に関しては、これまでさまざまな解釈がなされてきた。現在のジハード概念は、本来の異教徒に対する戦いに加え、墮落したムスリムに対して、真のイスラームに回帰するための戦いという改革思想をも含んでいる。マレーシアにおけるジハードは、複合社会という社会・政治環境の中で、前者よりも後者のコンテクストで、すなわち非ムスリムの非マレー系に対してではなく、マレー社会内の対立として発現する点が多い点が非常に興味深い。ジハード論は、その使われ方によって、自己と他者、内と外の社会認識を巧みに表現している。

- ④ 理念上のイスラーム普遍主義に基づき、社会の「根本的、全体的、奇跡的（超自然的）な変革」の実現が強調され、要求される。このイスラーム至上の世界観において、（建て前の上で）局所的なマレー固有のエスニック・アイデンティティは否定あるいは無視され、その一方で強固なイスラーム・アイデンティティが要求される。この点に、各教団活動及びそれを取り巻くマレー社会の不安定化要因が存在する。
- ⑤ 以上の全ての点は、総合的に、来世的な救済の指標（最短の近道）として運動に参加する者たちに作用し、現世的な目標に向けて教団の運動をより一層活性化していく。

II. 1970年代のマレーシアにおける狂信的イスラーム教団

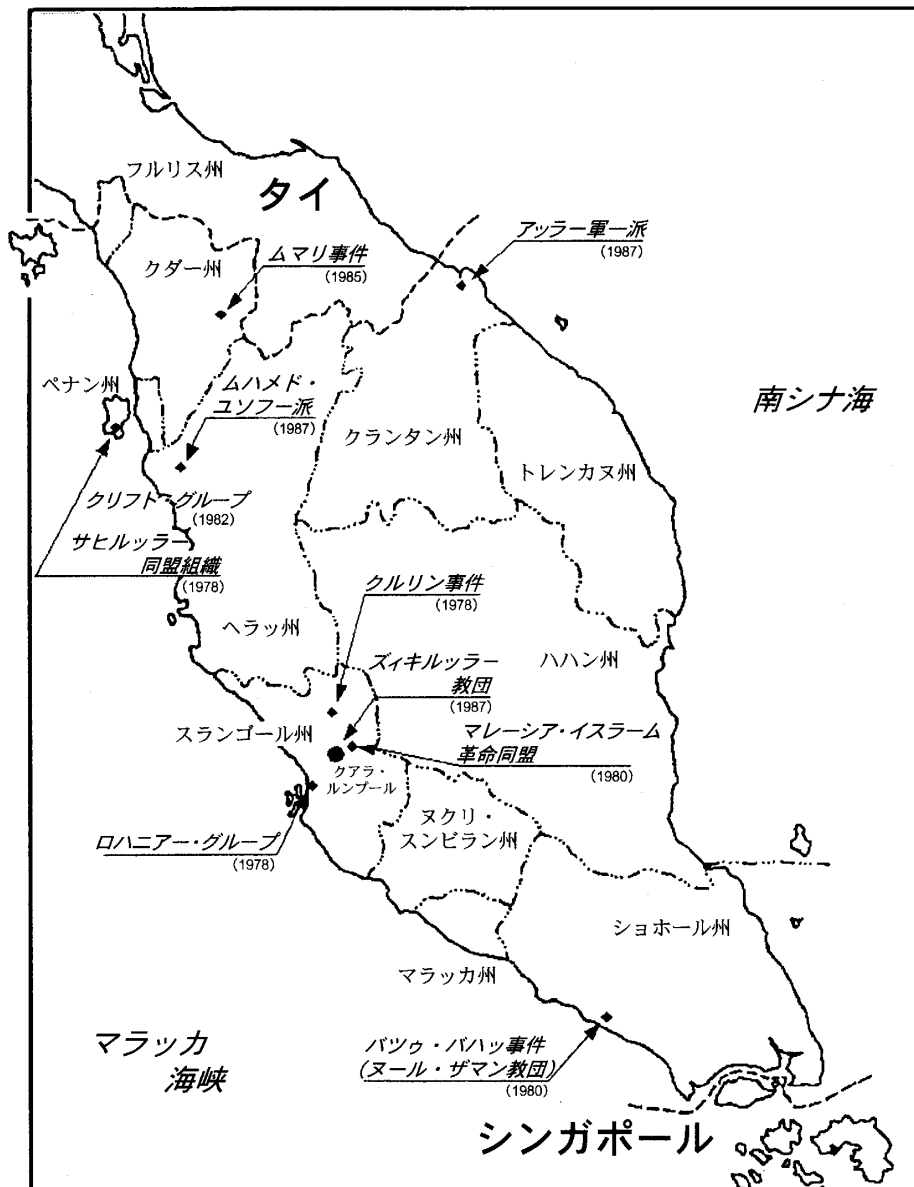
1970年代に入ると、マレー民族主義 (*Malay Nationalism*) 的特徴を色濃く残したイスラーム復興運動がマレー社会の中で急速に台頭してきた。この時期のイスラーム化運動が、全般に、1969年の民族暴動を契機に表面化したマレー系ムスリム対非マレー・非ムスリムの対立と深く関連していたことは言うまでもない。その特徴は、これまで指摘されてきたように、運動の支持母体および対象を、都市居住 (*Urban*)、高学歴 (*Educated*)、中産階層 (*Middle Class*) の、主としてマレー系のムスリムに求めていたことにあった。

マレー民族主義とイスラームが結びついた運動は、20世紀初頭にまでに遡る。1920年代までに英領マラヤの各地で台頭してきたマレー民族主義的な諸運動の特徴は、政治運動としては未成熟で、宗教運動としての性格が非常に強かったことが指摘されている。その中でも、マレー青年ムスリムを中心にした改革運動 (*Kaum Muda*)⁹⁾は、イスラーム主義的色彩を全面に打ち出し、イスラーム的価値の普及による社会変革を目指す運動として、現在のマレーシアやインドネシアなど東南アジア島嶼部地域で広く知られている。この改革運動は、西欧列強によるイスラーム諸国の支配、マレーを含むイスラーム圏の後進性、マレーの怠惰さ、社会の諸悪などについて言及し、それらを克服する最良の手段としたイスラーム信仰の回復を目標に挙げていた¹⁰⁾。こうして、マレーの民族的覚醒はイスラーム復興と密接に結びつき、社会運動としてマレー社会に定着していった。

1970に台頭してきたイスラーム復興運動の代表的な事例として、*Ā B I M* (マレーシア・ムスリム青年同盟)、*Darul Arqam* (ダールル・アルカム)、*Jemaah Tabligh* (ジュマア・タブリー) の3つの復興運動が挙げられる¹¹⁾。これらの復興運動は、イスラームの基本原則、クルアーンと預言者ムハンマドのスナ (*sunnah*) への回帰に基

づく信仰の純化を説く一方、イスラーム的見地からマレー社会の諸問題（主としてマレーの後進性と貧困）に対する批判活動を積極的に展開していた。これら在野の復興的諸運動に対抗して、マレーシア政府（マレー系与党UMNOを中心に）もイスラーム行政の改革とイスラーム化促進運動を積極的に展開していった。こうした二つのイスラーム化勢力の相乗的作用により、マレー（シア）社会全体にイスラーム優先／遵守の風土が醸成されていった。この時期、マレー優先（ブミプトゥラ）主義とイスラーム（至上主義）化とは、ある程度まで同義のことと見なされる傾向にあった。

狂信的なイスラーム教団も、このようなイスラーム化の潮流の中で独自の運動を展開していた。以下に、その事例を挙げる（下地図）。



西マレーシアにおける狂信的なイスラーム教団

※（ ）の数字は摘発された年

① ロハニアー・グループ (*Rohaniah Group*) 1971年成立 スランゴール州クラン
創始者Haji Abdul Mutalib Naimは、かつてマレー青年連盟 (*KMM: Kesatuan Melayu Muda*)¹²⁾の議長をつとめた人物である。この運動は、彼の教えを記した著書
“*Mengenal Roh* (霊の存在を知覚する)”に基づき展開された¹³⁾。1976年までに、著
名人や政府高官などを含む多くのマレー人が、この運動に影響され、あるいは活動に
参加していた。

この教団は、その声明文の中で、イスラーム国家の樹立と武力による現政権の打倒、
特に君主制度の廃止要求などを訴えていた。これに対して、政府は、1978年に国内治
安法を適用し、トップ指導者11名を逮捕し、同時に多数の火器その他の武器や旗、革
命軍の制服、闘争声明文の原稿などを押収した。これにより運動は瓦解した。

② マレーシア・イスラーム革命同盟 (*KARIM: Koperasi Angkatan Revolusi Islam Malaysia*) 1974年成立 クアラ・ルンプール

KARIMのリーダーシップは、1976年初頭に、創始者Mohd. Ali bin Abdul Raniか
らKamaruddin bin Abdul Manafへと移った。1980年初頭のKARIMの構成員は19名
で、その中には元軍コマンド部隊工作員一名含んでいた。

この教団は、1983年までに武力による現政権の転覆とイスラーム共和国政府の樹立
を具体的に計画していた。このため、1980年政府は国内治安法を発動し、4人の指導者
を含む14人を逮捕し、多数の武器を押収した。

③ クリプト・グループ (*CRYPTO*) 1977年成立 ペナン州及びスランゴール州

創始者Mokhtar bin Hassanは、マレーの伝統的護身術シラッ (*Silat Pulut*) の指
導者であり、呪医 (*bomoh*) であった¹⁴⁾。彼は黒魔術を巧みに操り、ペナン州やスラン
ゴール州、クアラ・ルンプールから約100人の信者を集めた。彼が説いた、イスラーム
の正統教義から大きく逸脱した教えの代表的なものは、次の通りである。

- i. 創始者Mokhtar bin Hassanは、救世主イマーム・マフディーである。
- ii. 断食は、一種の拷問に過ぎない。
- iii. メッカ巡礼 (*Haj*) は、単に岩の破片を崇拜する儀礼に過ぎない。
- iv. 喜捨 (*zakat*) 以外の、イスラームの五行 (*rukun Islam*) の廃止。
- v. 婚姻は、月と星の立ち会いの下で成立する。
- vi. 神の楽園は、地上にある。

そして、クリプト・グループは、最終的に神権政府の樹立を目標としていた。指導
者Mokhtar bin Hassanが説いた神権政府とは、文字通り「神による政府」であり、
それはすなわち、この世の終わりが近づくと再び降臨し、全世界を統治すると信じら
れるイエス・キリスト (*Isa*) の聖なる政府である。彼と従者は (神の命により) 既に

来世に住み、そこで神の政府の樹立に成功した。Mokhtar bin Hassanは、(マフディーとして)キリスト降臨の日まで、一時的にこの政府を治めることを許された。最後の審判の日はまもなく訪れ、それと同時に政府は神の手に委譲されると説いた¹⁵⁾。

以上のような教えに基づいて、クリプト・グループでは、神権政府樹立に向けて独自の国旗、身分証、通貨、制服などを準備し、さらに運動を軍部や警察へと広げて、現政権の打倒を計画していた。このように、明らかにこのグループは国家に脅威となる恐れがあり、政府は1982年ISAを発動し、主要な指導者9名を逮捕し、その結果グループは自然に崩壊した。

④ クルリン事件 (*Kerling Incident*) 1978~79年発生 スランゴール州クルリン

指導者Haji Mohamed bin Kamaruddinは、メッカ巡礼から戻った頃より、急進的な教えを説き始め、後に宗教教室を開いた。彼は、ムスリムを救済し、イスラーム信仰を純化するために、彼らを取り巻く社会環境の根本的な変革が必要であると説いていたと言われるが、その他の詳細は不明である。

この教えに刺激され、その信者たちは、1978年~79年にかけて、スランゴール州各地のヒンドゥー教寺院を襲撃し、破壊した。一連の破壊活動の中でも、1978年のスランゴール州北東部のクルリン襲撃は、多数の死傷者を出す惨事となった。

⑤ ヌール・ザマン教団 (*Tarikat Nur Zaman*) 1979年成立 ジョホール州バトゥ・パハッ及びパハン州ブカン

指導者Mohamed Nasir bin Ismail, 通称Mohamed Mahdi Isaは、1975年頃にマレーシアに逃れてきたチャム系のカンボジア難民で、クランタン州でムスリムに改宗したと言われる。彼は、布の行商するかたわら、黒魔術を巧みに操り、ジョホール州とパハン州から約30人の信者を集めた。彼はその教えの中で、彼自身が救世主イマーム・マフディーであり、さらに地上における神の軍隊の代表者であると宣言した。それ故に、教団の信者は、彼の教えに無条件に服従しなければならない。そして、その恭順の結果、死後信者は皆最後の審判なしに神の楽園を保障されるといったことが、ヌール・ザマン教団の教えの根幹を成していた。

こうした思想に基づき、まず、イスラームにおいて最も重要な信仰の告白 (*syahadat*)¹⁶⁾から、預言者ムハンマドについての一行が削られ、また祈りの言葉全般で預言者はイマーム・マフディーと彼の友キリストの次に格下げされた。さらに、日常生活の中の宗教実践、特に「礼拝」にも多くの変更が加えられた。例えば、モスクでの金曜日の礼拝は義務ではなく、平素の集団礼拝も必要ない。そして、教団信者以外の者がイマームになる集団礼拝は絶対に禁じられた。また、礼拝時の言葉・場所・手順や体の清め方なども、悉く変更された。その一方で、新たに祈願の礼拝やクルアーン

の第1章開扉 (*al-Fatihah*)¹⁷⁾を唱えることが推奨され、その細かい手順が定められていた。

1980年ジョホール州の宗教局は、以上のような教団活動の実態捜査に乗り出して、異端の結論を下し、住民の警戒を訴えた。この捜査結果に対して教団側は、Mohamed Nasirを含む14人の聖戦士部隊 (*Mujahiddin*) を編成し、白装束に山刀という出で立ちで、バトゥ・パハツの宗教事務所と警察署を襲撃した。これにより、Mohamed Nasirら襲撃部隊8人が死亡、6人が負傷し、警察官と一般市民にも17人の負傷者を出した。いわゆるバトゥ・パハツ事件である。この襲撃に参加した信者たちは皆、この戦いはジハードであり、異端者相手の如何なる戦闘でも決して死ぬことはないと信じていた。この場合異端者とは、非ムスリムに加え、ムスリムも含め、彼らの教団活動を否定する全ての人々を指していた。

⑥ サビルッラー同盟組織 (P.A.S. : *Pertubuhan Angkatan Sabilullah*) 1967年成立
ペナン州、クダー州、及びプルリス州

サビルッラーとは、「アッラーへの道」を意味する。1965年に半島部マレー連盟の活動禁止処分後組織された、サビルッラー軍が母体となっている。ペナンで起こった商店のストライキに端を発した民族間の不和を受けて、サビルッラー軍はケダー州の各地のモスクやスラウに放火し、犯人として非ムスリムを囿にして、民族間の衝突を促そうと計画したが、首謀者が逮捕され、多くが当局に投降したため、失敗に終わった。

その後一時鎮静化していたが、1972年Isa bin Hussein, 通称Bong Isaのリーダーシップの下で再び活発になり、クダー州の各地に広まり始めた。指導者Isaは、カーリーフ (*khalifah*) の称号¹⁸⁾を用い、イスラーム国家の樹立を主要な目標としていた。それ故、マレー系のイスラーム政党P A S^{パ ス} (*Parti Islam Se-Malaysia*) から大勢参加していたが、1974年にP A Sが与党連合に参入すると、それに不満とした一部の急進勢力が1978年にサビルッラー同盟組織を形成した。この組織結成の目的は、武力によるイスラーム政府の樹立であり、運動は一層急進化していった。創立当時、参加者は約400人を数えた。

P A Sに操られたこの組織は、1980年の稲作補助金制度¹⁹⁾問題を利用して農民を扇動し、クダー州政府庁舎前で大規模な米価値上げの示威行動を起こした。この事件で、14人の同盟組織メンバーを含む、92人の逮捕者を出した。政府は、P A Sと同盟組織の関係を示唆したが、P A S中央執行部はこれを否定した。

以上のように、1970年代の狂信的なイスラーム教団の運動は、極めて小規模で、秘密結社的色彩が強く、局地的現象であった。ここで注目したいのは、その急進的かつ超越論的思想である。その狂信的、神秘主義的傾向が強調される一方で、前節④に述

べた通り、現在の資料からわかる限り、それぞれの運動理念には「マレー」という民族概念、あるいはマレーの利害という民族的な考え方が欠落していた。それ故に、これらの運動は、広範なマレー社会を巻き込んだ民衆運動にまで発展し得なかったとも考えられる。そして、そのことは運動が一層急進化する相乗効果をもたらした。マレーシアのイスラーム化運動全般、特に民族暴動後のイスラーム復興運動は、民族（固有性）と宗教（普遍性）の間の微妙なバランスの上に成り立っていたのである。

このことは、1970年代後半のナスルール・ハック (*Nasrul Haq*) というシラットの一流派の隆盛からも伺い知ることができよう。シラットとはマレー系の伝統的護身術の総称で、かつては各地に無数の宗派が存在し、秘密結社的性格が強い宗派がそれぞれに独自の奥義を伝授していた。ナスルール・ハックもその一派である。現代のシラット諸流派の多くは、マレーの伝統的な神秘主義を基礎に、随所にイスラームの諸概念を取り込んで、イスラーム化する社会潮流に巧みに適応してきた。そうした諸団体の中で、ナスルール・ハックは、マレーシア全国に絶頂期30万人の加入者を誇る大教団にまで成長した。加入者の中には、各州の王族や政財界の著名人なども多数含まれていた。

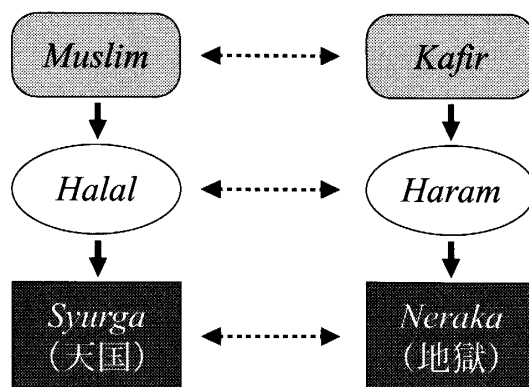
III. 1980年代のマレーシアにおけるPASと狂信的イスラーム運動

1970年代都市部を中心に活発に展開したイスラーム復興運動は、1970年代末から1980年代に入り、マレー系の地方都市、さらに農村部へと浸透していった。これに伴う農村社会のイスラーム化現象を促進した社会的要因は、1970年代の都市における民族意識の高揚にではなく、村落社会内におけるリーダーシップの対立にあった。政府による村落自治や宗教行政の改革が進む過程で伝統的なリーダーの権威は失墜し、新たに地方開発によって大幅に広がった社会的ネットワークを巧みに操るリーダーが登場してきた。両リーダーにとって、イスラームは、マレー社会内部においてそれぞれの権威を正当化する最も有効な手段となったのである。

このような状況を積極的に利用し、一層対立を促したのが、1978年に与党連合から離脱したイスラーム政党PASであった。マレー農村部におけるイスラーム化は、当初から、政府／UMNO対PASという政党間の権力抗争の手段となっていた。

① PASの異端視運動 (*Gerakan Mengafir*)

この運動は、「異端者 (*kafir*)」²⁰⁾と「ハラーム (*haram* : 禁止)」という二つの概念から構成される(右図)。PASは、この二つの概念を政敵UMNOとその支持者に適用した。非ムスリムとの連合政権である現政府の政策・法案は、非イスラーム的な、禁じられた行為であり、その政府とUMNOは不信心な者 (*munafik*)、ひいては異端者の集まりである²¹⁾。そして、その政府を支持することは、同様に不信心な者の振る舞いであり、真のイスラームの教えに反している。これが、異端視運動の基本論理である。この論理に、さらに「抑圧する者」と「抑圧される者」の概念が組み合わさる。



もともこの運動は、クランタン州において1963~64年に、当時州政府与党であったPASが、異端者の烙印を押すことでUMNO支持者を威圧し、彼らの票を獲得しようという意図で、総選挙を前に打ち出した選挙戦術の一つに過ぎなかった。従って、PASが1964年の選挙に勝利すると、運動の勢いも徐々に衰え、民族暴動を経て与党連合の国民戦線に加わった1970年代中頃以降には殆ど見られなくなっていた。この時期のPASは、マレー民族主義的コミューナリズム政党としての性格を多少とも保持していたと言える。

ところが、1978年に国民戦線を離脱すると、PASはその年の総選挙で大敗し、クランタン州の政権をも失った。こうした政治的危機に際して、PASは、1979年より、トゥレンガヌ州を皮切りに、マレーシア全国各地で再び異端視運動を開始した。特に、マレー系が圧倒的に多く、PAS支持基盤の強固な半島北部4州では、その草の根的な運動が村落社会内部で一段と過激に展開された。

政府支持者に対する異端視運動は、村落社会において、主としてボイコット(排斥)運動という形を取った。具体的には次のような事例が挙げられる。

- i. 政府支持のイマームが執行する全ての儀礼(礼拝, 婚姻, 埋葬)の無効
- ii. 政府に対する喜捨の支払拒否
- iii. 政府支持住民と一緒にの集団礼拝, 金曜礼拝の拒否(無効)
- iv. 政府支持住民の供犠した食肉の拒否
- v. 政府支持住民との間の婚姻の無効
- vi. 政府支持住民との間の子供は否認知
- vii. 政府支持住民と同一の墓地への埋葬の拒否

viii. 政府支持住民主催の饗食会への出席拒否

しかも、以上のような活動に従わないPAS支持住民も、不信心者と見なされ、新たに排斥の対象とされた。さらに、この運動を徹底するために、PASの地方運動員らが、各地の講演会で盛んにUMNOとその支持住民を「不信の徒・異端者」として誹謗中傷し、PAS支持の住民を扇動した。各地に展開した運動では、多くの場合、伝統的な宗教権威、例えばポンドツ学校の教師やハジ、ウスタスなどと呼ばれる人々²²⁾が、象徴的指導者の役割を果たしていた。

以上のようなPASとその支持者による急進的な活動の結果、多くのマレー村落や中小都市において、コミュニティ内の自治活動がUMNOとPASの二派に分断してしまい(例えば、一つの村に二つのモスクあるいは礼拝所が存在する)、両派の間でしばしば物理的な衝突も起こっていた。この村落共同体の分裂は、行政単位としての村社会の分裂であった点で、政府側に重大な影響を及ぼしていた。この運動は、総選挙の年に当たった1982年頃から次第にその過激さを増し、1985年のクダー州ルボッ・ムルバウ(Lubuk Merbau)での州議会補欠選挙では、両派が真っ向から衝突し、PAS支持の住民一名が死亡する事件にまで発展した。政府は、このような状況にISAを発動し、事件発生以前から急進的な活動に対処していた。

この運動の背景に、現行の法に代わり、イスラーム法を基づく新たな法体系を定め、イスラーム知識人会議が全ての行政を統轄する新統治秩序を樹立しようという、PASのイスラーム国家論の存在を無視できない。

② ムマリ事件 (Peristiwa Memali) 1985年11月19日、クダー州バリン郡ムマリ村

この事件は、上述①の異端視運動が引き起こした惨事であった。事件は、11月21日付けの現地英字新聞New Straits Timesの第一面を次のように飾った。

バリンの陰鬱な一日 クアラ・ルンプール 水曜日—昨日、クダー州バリン郡ムマリ村(Kg.Memali)において、住居に潜む37人の指名手配犯の一味に対する警察の強行突入があり、警察側4人、犯人側14人の死者を出す惨事となった。

その一団は、約400人の支持者から成り、指名手配リストに載る一団のメンバーを逮捕しに向かった警察当局に対して、頑強に抵抗した。....8:30am~1:30pmの間の作戦を通じて、20人の警察官と9人の住民が負傷した。....警察当局は、159人の住民—うち男性118人、女性29人、子供(11歳以上)12人—を逮捕し、一団が保有していた全ての武器を押収した。

殺害された犯人一味の中に、イブラヒム・リビア(Ibrahim Libya)もしくはマン・リビアとして知られ、自己流の教えを説いていた宗教指導者イブラヒム・マフムード(Ibrahim Mahmud)、45歳がおり、彼がこの犯人一味の首謀者と信じら

れている。バリン郡一帯には、昨日3:00pm~今朝5:00amまで外出禁止令が出され、....状況が正常化するまで続けられる。....」

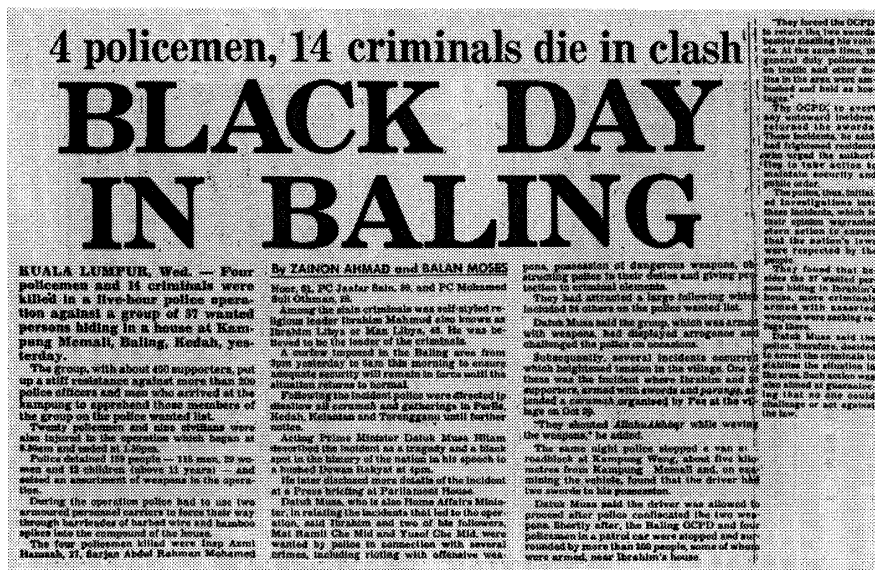


写真1 ムマリ事件の第一報 (New Straits Times, 1985年11月19日より) 本文に抜粋を記載

以上が、ムマリ事件という呼び名で知られる流血事件に関する新聞報道の概要である。事件の翌年、政府は事件当日の様相を録画したビデオを公開した。その中で、イブラヒム・リビアー派を死守しようと彼の自宅周辺に集まった多数の支持住民は、恍惚状態に陥り、“Allahu Akhbar (アッラーは偉大なり)”と叫びながら必死に警察当局に抵抗していた。この事件で死亡した住民の殆どは、山刀や農具など、生活用具を転用



写真2 押収された武器の一部 (Malaysian Federal Government (1986), Peristiwa Memali より)

した非常に粗末な武器を振り回しながら、警察隊の機関銃を前に臆せず突撃していった者たちであった。この事件は、未だに多くのマレー・ムスリムの心の中に深い傷跡を残している。

この事件は、異端視運動に端を発するマレー系の政党間の政治抗争が一僻地村落の盲目的住民を巻き込んで引き起こされた不幸な出来事であった。しかし、その後のさまざまな報道や報告から、単に政治問題として片付けられない、上述した一連の狂信的な教団とも共通する過激な思想が、事件の背景に存在していたことがわかった。そうした思想をもとに、イブラヒム・リビア一派は、一種の教団として住民をまとめ、彼らから強固な支持を獲得することに成功していた。

首謀者イブラヒム・リビアは、彼自身で、前出IIで取り上げた70年代の狂信的指導者のようにメシアとしてのイマーム・マフディーを名乗ることはなかったが、非常に強いカリスマ性を持っていたようである。彼は、ポンドゥ学校等で教育を受けた後、さらにインド、エジプト、リビアでイスラーム研究を修めた。リビアの援助のもと布教師として帰国し、しばらく政府の宗教局で働いた後、1976年郷里のチャロツ・プテ村 (*Kg. Carok Putih*) に戻り、マドラサを開いた。そこを基盤に、彼は、PASの運動家として政治活動（異端視運動も含む）を行いながら、支持住民に対して概ね次のような教えを説いていた。

1). ジハードと殉教 異端視運動は、1982年の総選挙での大敗を機会に、積極的な武力闘争へとより一層過激化していった。

「...ジハードとは、イスラームを護持しているように振る舞いながら、実際には全くそんな気がない無礼な政府に対する武装した反逆である。」

「現代において、...神の楽園に入れてもらうのは非常に難しい。...殉教者は、預言者、聖人、非常に敬虔な者 (*solihin*) と同等の地位にある。...楽園に入るための資格を得るために一般のムスリムに残された唯一容易な道は、殉教者として死ぬことである。」

「我々の意志 (*niat*) は、アッラーの大義 (*fisabilillah*) のために戦うことである。殉教者の死によって、その家族、友人60人に神の加護があるだろう。」

「剣はジハードのシンボルである。」

などと説いていた。この当時PAS内部では、このような急進的ジハード革命論が活発であり、イブラヒム・リビアに限らず、各地の説教会でPAS運動家たちは必ず同様の内容を説いていた。こうした傾向には、多分に1979年のイラン革命成功が影響していたようである。

イブラヒム・リビアとその一団は、1985年に入ると、ジハードに向けて具体的な行

動を起こすようになった。まず1985年3月に、精鋭20人からなる聖戦士団を、さらに4月には、イスラーム革命政府宣言を表明して、彼のマドラサがあったシオン地区 (*Mukim Siong*) のPAS支部に「イスラーム革命運動推進委員会」を組織した。この宣言の前文で、彼らは独自の統治機構の組織と実権の掌握を高らかに唱っていた。ここに至って、支持住民は政府と異端者に対する闘争の目的をはっきりと確認した。

2). 呪い札 (*tangkal*) と呪文 (*jampi*) 異端視運動以来徐々にチャロツ・プテ及びムマリ村一帯に社会不安が高まる過程で、治安当局は厳しい弾圧に乗り出した。ところが、この弾圧が、逆にイブラヒム・リビアー派の態度をより一層強硬にし、1985年の夏頃から両者の間に緊張が急速に増幅していった。

こうした緊迫した状況に呼応して、武器収集など革命実行に向けての戦闘準備を進める中、イブラヒム・リビアーは、マレーの伝統的な呪術者やタリカッの導師などと同様の呪術的・神秘的な手段を用いていた。

「(呪い札は) ココナツの葉脈、きんまの葉柄、マッチなど容易に折れる棒状のものを使い、...息を止めて、“*Bismillah (in the name of Allah)*” と7回、クルアーン第1章開扉を1回、*Selawat* (平安の祈り) を1回、最後に“我は、自らを変化せんがために、我の中から取らん (*Aku ambil daripada aku untuk buat pengalih diri aku*)” という呪文を唱え、...短く折ってへそのところに絆創膏で貼り付ける...」

呪い札は、警察当局と衝突した事件の前夜、上述あるいはそれに類する手続きで、イブラヒム・リビアーから授けられ、もしくはその作り方を教えられた。呪い札を身につけた住民たち、特に聖戦士団は、その不思議な呪力により銃弾をも跳ね返す不死身の肉体が得られると信じていた。これに加え、敵 (警察隊) の戦意を殺ぐための各種の呪文や、味方の闘志を増強するための特殊な呪文がかけられた、タンク一杯の「魔法の水」なども用意されていた。

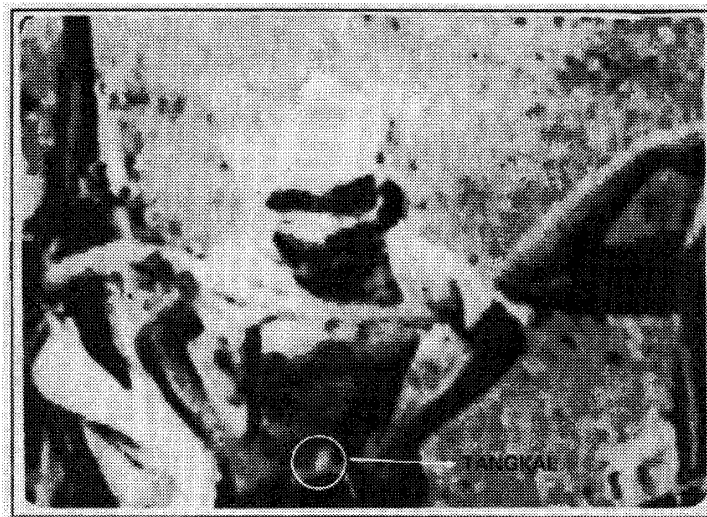


写真3 呪いの護符

(Malaysian Federal Government (1986),
Peristiwa Memali より)

以上のようなイブラヒム・リビアの教えに従った住民たちは、死をも厭わず果敢に警察隊の銃口の前に立ちはだかり、戦いに挑んでいったのであった。そして、先の新聞報道に見たような、悲惨な結末に終わった。

さらに、事件後は、死亡したイブラヒム・リビアらが殉教者か否かについて、また事件の真相について、マレーシアの各地で激しい議論が繰り返された。政府とPASは、それら議論に関して、それぞれ独自のファトワーを出して対応したが、両者が真っ向から論争することはなかった。また、この事件に関連して、その翌年1986年トレンガヌ州ルシラ村 (*Kg. Rusila*) で、PAS現副総裁兼州知事ハジ・ハディ (Hj. Hadi Awang) の講演に集まった群衆と警察が衝突 (ルシラ事件) し、両者の緊張関係はさらに高まった。現在も、彼らの墓には参拝者が絶えない。ムマリ村のイブラヒム・リビアのマドラサは、現在も宗教学校として、またPASの活動拠点として機能している。PASは毎年11月19日前後に、そこでムマリ事件の殉教者を讃える集会 (*Majlis Syuhada Peristiwa Memali*) を開いており、80年代には支持者数万人が集っていた。しかし、各地の異端視運動は、ムマリ事件の後次第に鎮静化す、90年代には、以前の村落自治を二分するような深刻な対立はほとんど見られなくなった。

③ 以上の2つに加え、マレーシア各地では、前節に取り上げた狂信的イスラーム教団の系譜を引き継いだ、さまざまな団体が1980年代に活動していた。しかし、その活動に関しては不明な点が多い。ここでは、ムマリ事件以後に発覚した狂信的活動の幾つかを簡単に紹介する²³⁾。

1). ズィキルッラー教団 (*Tarikat Zikirullah*) 成立年不詳 クアラ・ルンブール

指導者Hassan bin Yaakubは、虎の子Hassanとも呼ばれ、彼の身体と精神は神の真理の光と共にあり、預言者ムハンマドの魂が吹き込まれ、彼がイマーム・マフディーとなるべき時が到来したと説いた。この教団は、アフマディーア派²⁴⁾の教えに従う一派で、約300人の信徒を集めた。活動の中心は、唱名 (*zikir*) にあった。

2). ムハメド・ユソフ一派 (*Kumpulan Muhamad Yusof*) 1987年成立 ペラッ州

指導者Muhamad Yusof bin Abdul Karimは、約40人の支持者と共に、独自の断食月明けの礼拝 (*Aidilfitri*) とハジの礼拝 (*Aidiladha*) を、他のムスリムとは別に行った。

3). アッラー軍一派 (*Jundullah*) 1987年成立 クランタン州 (主に州都コタ・バル)

この一派は、指導者 (イマーム) Ustaz Abdul Latiff bin MohamadとPAS党員及び支持者約150人から成る。1987年夏、にわかには民族間 (マレー対華人) の緊張が高まり²⁵⁾、それに刺激されて誕生した。この一派は、再度民族暴動が起こった際に、マレーの救世主となり、軍事行動を通じてイスラーム的統治機構を樹立しようともくろむ

んでいた。組織内部には役員、委員会などが設置されていた。運動参加者に対しては、宗教教育と同時に軍事教練が施され、その一部は南タイに派遣され、武器を収集し、さらにイスラーム解放ゲリラに参加した。

まとめ

以上、1970年代～80年代、マレーシアのイスラーム復興運動興隆期において登場した政府によってあるいは一般ムスリムの間で狂信的とも見なされた、いくつかの教団や運動を見た。それらは、広くマレーシア社会そのものの変化に伴い、イスラーム化の潮流がその受容母体であるムスリム社会、特にマレー社会に拡大していく過程で、ムスリムがイスラームとそれを取り巻く社会環境に対してどのように対応しようとしたのか、そして彼らのそうした姿勢の変化を端的に表していたと言える。

マレーシアは、1969年の民族暴動を契機に以前より潜在していた民族問題が顕在化してしまった。その結果、とりわけマレー社会では、民族意識がイスラームというチャンネルを通じて覚醒していく。それが、70年代を代表するイスラーム復興運動であった。ゆえに、その支持母体は圧倒的に都市という多民族空間に展開し、運動は多分に民族主義的な性格を帯びたのである。従って、IIで取り上げた、主として都市近郊に登場した1970年代のイスラーム教団の多くは、イスラーム復興運動というマレーシア社会の大きな潮流に乗って拡大していくことはなく、狂信的な性格が極めて高く、小規模な活動にとどまった。

民族暴動後の1970年代、一方でマレー・ムスリムの民族＝イスラーム意識の覚醒が進む中、他方で、そうした動きに呼応するような形で、政府はプミプトラ政策²⁶⁾のもとで、マレー社会の近代化を進めていった。そして、政府の諸政策は、とりわけマレー社会の経済的な後進性を解消することに向けられる。やがて1980年代になると、マレーシアは経済的な発展を遂げるとともに、それまで農村に依拠していた圧倒的多数のマレー社会は、国民経済の中で次第に都市化していくことになる。これが、イスラーム復興運動のマレー農村部への展開だと考えられる。ところが、こうした都市部から農村部へのイスラーム主義化の展開において、結果としてイスラームと民族意識という枠組みは次第に変貌せざるを得なくなる。すなわち、マレー農村社会は、都市空間のような多民族複合環境を有していないのである。従って、1980年代のイスラーム化の動きでは、マレーの民族意識にとってのイスラームの重要性ではなく、マレー・コミュニティ内部でムスリムにとってのイスラームとは何なのかという、より本質的な関心に向かっていったのである。この点で、特に1980年代の狂信的な団体の活動の多

くが、主としてPASの政治運動の一環として登場し、イスラーム革命という目標を明確に打ち出していた点が重要なポイントである。

ところが、こうしたPASが訴える運動理念自体は、復興運動に刺激されたイスラーム化現象全般の農村部への拡大に伴い、全国レベルで広範に流布していたにも拘らず、各地に組織された運動は、1970年代と同様に局所的かつ小規模で、狂信的な秘密結社化する傾向にあった。この傾向には、明らかにPASの政治的な影響力（あるいは政治力を行使する能力）の低下と関連していた。現代のマレー村落政治の顕著な特徴でもあるが、PASの政治運動は、先述の通り、マレー村落社会内部のリーダーシップの対立に根ざし、その支持層を形成してきた。その際、各地の運動組織は、現支配権威に対抗する運動の正当性の根拠を、イスラーム革命という普遍的理想に求めていた。その結果、社会を改革しようとする意図は、宗教の超越論的手段への依存の形をとって、現実社会に対応していた。

ところが、そもそもマレー社会の政治（改革）運動は、民族主義の萌芽と共に、その歩みを始め、現在に至っている。すなわち、現実にはマレー社会において、エスニシティの問題と切り放して、社会改革を論じることは殆ど不可能なのである。このことが、マレー社会がイスラーム化を受容する際に、エスニシティとイスラーム普遍主義の間でジレンマを生んだ。上述のさまざまな狂信的運動は、マレーという民族概念の欠落という問題に直面せざるを得ない。すなわち、運動に参加した者たちは、意識の上でマレーでないムスリムという特殊な人々なのである。これが、1970・80年代の党派的活動を狂信的あるいは逸脱的な活動へと向かわせた要因の一つであったと考えられる。

さらに、イスラームにおける救済願望は、一般に来世に向けられている。この願望を現世的な運動に転換するために、やはり超越論的手段として、終末論的マフディー信仰やジハードによる殉教精神が必要とされていた。しかし、実際には、マレー社会が直面した諸問題の多くが、イスラーム的な理念ではなく、既に政府の現実的なブミプトラ政策によって、マレーシアのエスニックな環境の中で議論され、しかもある程度解決されていったのである。

以上のことから、現代マレーシアにおけるイスラーム化運動は、エスニシティとイスラーム理念の間にバランスが保たれている限りは、安定して社会に浸透していくことができるのだということがわかる。

【参考文献】

- 板垣雄三・後藤明編 (1992), 『事典イスラームの都市性』, 333~334ページ, 亜紀書房。
- 板垣雄三・佐藤次高編 (1986), 『概説イスラーム史』, 有斐閣選書。
- 井上順孝・大塚和夫編 (1994), 『ファンダメンタリズムとは何か』, 新曜社。
- 黒田壽郎 (1983), 『イスラーム辞典』, 東京堂出版。
- ザイナル=アビディン=ビン=アブドゥル=ワーヒド編 (1983), 『マレーシアの歴史』(野村亨訳), 山川出版社。
- 中澤政樹 (1987), 「ケダ州マリ事件に見るマレー・アイデンティティとイスラム」(筑波大学修士論文), 未発表。
- (1989), 「JEMAAH TABLIGH: マレー・イスラム原理主義運動試論」, 水島司編『マレーシア社会論集 I』, 73~106ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- (1991), 「マレーシアにおけるイスラーム原理主義運動の動向」, 『イスラームの都市性研究報告第96号』。
- (1992), 「宗教運動と都市: マレー半島」, 板垣雄三・後藤明編『事典イスラームの都市性』, 333~334ページ, 亜紀書房。
- (2002), 「ダアワ運動」, 片倉もところ (編集代表) 『イスラーム世界事典』, 255~256ページ, 明石書店。
- 藤本彰三 (1989), 「村落レベルにおける新経済政策と農民の対応」, 堀井健三編『マレーシアの社会再編と種族問題』, 研究双書 No.386, 215~44ページ, アジア経済研究所。
- 萩原直之 (1989), 「ブミプトラ政策と野党」, 堀井健三編『マレーシアの社会再編と種族問題』, 研究双書 No. 386, 49~74ページ, アジア経済研究所。
- 堀井健三 (1987), 「ブミプトラ政策下におけるイスラム原理運動と村落社会の変動」, 『アジア経済』, 第28巻 2号, 84~105ページ, アジア経済研究所。
- Chandra Muzaffar (1987), *Islamic Resurgence in Malaysia*, Petaling Jaya: Penerbit Fajar Bakti.
- Comber, Leon (1983), *13 May 1969: A Historical Survey of Sino-Malay Relations*, Kuala Lumpur: Heinemann Asia.
- Dusuki Haji Ahmad, Haji (1976), *Kamus Pengetahuan Islam*, Kuala Lumpur: Yayasan Dakwah Islamiah Malaysia.
- Hamdan Hassan (1992), *Tarekat Ahmadiyah di Malaysia: Suatu Analisis Fakta Secara Ilmiah*, Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Hussin Mutalib (1990), *Islam and Ethnicity in Malay Politics*, Singapore: Oxford University Press.
- (1993), *Islam in Malaysia: From Revivalism to Islamic State*, Singapore: Singapore University Press.
- Kamal Amir (1980), *Tragedi Batu Pahat*, Kuala Lumpur: Utusan Publications & Distributors.
- Kessler, Clive (1980), 'Malaysia: Islamic Revivalism and Political Disaffection in a Divided Society', *Southeast Asian Chronicle*, no.75, pp.3-11, Berkeley
- Malaysian Federal Government (1984), *Threat to Muslim Unity and National Security* (Kertas Perintah Tahun 1984), Kuala Lumpur.
- (1986), *Peristiwa Memali* (Memali Incident: Kertas Perintah 21, Tahun 1986), Kuala Lumpur.

- (1988), *Kearah Memelihara Keselamatan Negara* (Towards Preserving National Security: Kertas Perintah 14, Tahun 1988), Kuala Lumpur.
- Mohamad Abu Bakar (1986), *Islam and Nationalism in Contemporary Malay Society*, Taufik Abdullah and Sharon Siddique, eds., *Islam and Society in Southeast Asia*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Muhammad Syukri Salleh (1992), *An Islamic Approach to Rural Development-The Arqam Way*, London: Asoib International.
- Nagata, Judith (1984), *The Reflowering of Malaysian Islam: Modern Religious Radicals and Their Roots*, Vancouver: University of British Columbia Press.
- (1986), *Impact of the Islamic Revival (Dakwah) on Religious Culture of Malaysia*, B. Matthews and J. Nagata, eds., *Religion, Values and Development in Southeast Asia*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- PAS (1987a), *Percikan Darah Syuhada*, Selangor: Syarikat Prema.
- (1987b), *Madrasah Islahia Diniyah Kampung Memali, Baling, Kedah*, Alor Star: Dewan Pemuda PAS Kedah.
- Roff, William (1967), *The Origins of Malay Nationalism*, New Haven: Yale University Press.
- Sidi Gazalba and Zainab Ismail, eds. (1993), *Dakwah Islamiah Malaysia Masa Kini*, Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.
- Zainah Anwar (1987), *Islamic Revivalism in Malaysia: Dakwah among the Students*, Petaling Jaya: Pelanduk Publications.

【マレーシア発刊の新聞など】主に、1970年代後半から1987年まで

New Straits Times (日刊英字新聞)

Star (日刊英字新聞)

Utusan Malaysia (日刊マレー語新聞)

Harakah (PAS機関誌：隔週発刊，マレー語)

Aliran Monthly (イスラーム系団体*Aliran*の月刊誌，英語)

注

- 1) 1969年5月13日，首都クアラ・ランプールを中心に，主としてマレー半島部の主要な都市部において，マレー系住民と非マレー系住民が衝突し，双方合わせて100人以上の死者と多数の負傷者を出す事件が発生した。詳細は，Comber, Leon (1983)。これまでのマレーシア研究では，この事件を慣習的に「人種暴動 (*racial riot*)」と呼んできたが，その表現には人種と民族の概念上の混乱を多分に含んでいることが指摘されており，本稿ではより適切な表現として“民族暴動”と呼ぶこととする。
- 2) ダッワー (*dakwah*) とは，アラビア語源で，本来「神への畏敬の念 (*taqwa*)」の意。マレー語では，敬虔，信心，帰依といった意味から派生して，広い意味で正しいイスラームの教えを自己及び他人にもたらしめるための全ての行いを，またより一般的に狭い意味で布教活動 (*mission*) として用いられている。マレー語のイスラーム事典によると，ダッワーとは，
 1. イスラーム化されていない状態をイスラーム的価値を所有する状態へと換えるための努力，聖なる闘争

2. 真のイスラームの教えを不信心なイスラーム教徒に広めるための宣伝活動、伝道 (*tabligh*)
3. 社会福祉を特徴とする集会への招待
と定義されている [Haji Dusuki Haji Ahmad (1976), p.69].
- 3) ファトワーとは、イスラーム法学者 (*mufti*) による法的意見。時代の変化や状況の推移に応じて生じるイスラームの諸問題に関して、イスラーム法の立場から法的解釈したもの。
- 4) 国内治安法は、1960年初頭、共産主義などの反政府活動に対処する目的で制定・施行された。この法律の特徴は、政府が特定の団体や活動について国家・社会の治安を脅かすと判断される場合、それが具体的な実行行為を発揮する前に、裁判などの法的手続きを経ずに無条件・無期限で関係者を逮捕拘禁できるという点にある。多くの人権団体はこうした法律の特徴を基本的人権の侵害に当たるとして批判してきたが、現在も極めて実効性の高い法律として、しばしば政府による治安維持の目的で発動されている。
- 5) これまで現代社会におけるイスラーム諸運動は、一般にイスラーム原理主義、いわゆるファンダメンタリズムと呼ばれることが多かった。しかし、イスラームに限らず、宗教活動というものは、程度の差こそあれ、必ず根本原理に基づくものである。特にイスラームの場合、この特徴が非常に顕著に見られ、イスラーム社会や文化の根底に常に根本原理への回帰という命題が課されている。従って、イスラーム的であることは、すなわち原理主義なのである。故に、今日、広い意味でイスラーム的色彩を強く主張する考え方をイスラーム主義 (*Islamism*) と、そして中でもイスラームの再興や活性化を標榜する運動はイスラーム復興運動 (*Revivalism*) と呼ばれることが多い。
- 6) こうしたイスラーム国家思想は、主として1970年代中頃国外留学中のマレー系学生などを通じてマレーシア国内のムスリム学生組織、マレーシア全国イスラーム学生連合 (PKPIM) や知識人の間に浸透し、特に1979年のイラン革命を契機に急速に展開、隆盛していたと言われている。
- 7) マフディーとは、「神により導かれた者」の意。一般にイスラームの終末論と結びついて、末世に人々の心から消えようとする信仰を再び回復するために現れる救世主、乱れた世の中を正道へと戻すための理想的統治者と捉えられている。そして、イスラームの伝統の中に根づいた、イスラームの正義のために全世界を解放する救世主の出現を待望する終末論的マフディー信仰は、しばしばイスラーム世界の各地で民衆蜂起の形を取って発現してきた。特に、スーダンのイスラーム教団マフディー派の反乱はよく知られている。
- 8) イスラーム学者の中には、ジハードをムスリムにとっての第6番目の義務と説く者もいるが、ジハードは個人の義務ではなく、ムスリム共同体全体の集団的義務である点で他の義務とは性格を異にする。
- 9) *Kaum Muda*とは、「若者一派 (*young gang*)」という意味から派生した、改革派を指す。これに対して、守旧派は*Kaum Tua* (年寄り一派) と呼ばれる。
- 10) こうした思想は、1906年創刊のマレー語新聞『アル=イマーム (Al-Imam)』(信仰の意) 中にはっきり表れている。『アル=イマーム』は、当時のオピニオンリーダーとして、青年マレーの民族運動に多大な思想的影響を与えたと言われる [Roff, William (1967)]。
- 11) 3つの運動について、その概略を説明する。
 1. ABIM: 1971年に、元大蔵相アヌワール・イブラヒム (Anwar Ibrahim) を中心に、マレーシア全国イスラーム学生連盟 (PKPIM) を母体にして組織された。都市ムスリムの連帯とイスラーム教育機会の増進を助ける一方、マレー社会の諸問題に関して政府を組織的に批判する勢力として活躍した。70年代を通じて、復興運動を主導する最も重要な勢力であった。
 2. ダールル・アルカム: 1971年に、カリスマ的指導者ウスタス・アシャアリ・ムハンマド (Ustaz Asha'ari Muhammad) が興した運動。彼は、イスラームにおける個人の義務の重要性を強調し、その実践のために独自のコミュニン (アルカム村) を形成し、そこで理想的な自給生活を実現した。その一

方、各種出版物の発行や医療施設の開設、食品の販売を通じて布教活動も行っている。

3. ジュマア・タブリー：1950年代にインドで成立し、インド系ムスリムを通じて、マレーシアにも伝わった。イスラーム(モスク)中心の生活様式を理想とし、信者は一定期間俗世間から離れ、各地のモスクでの静修(学習)と布教活動が義務づけられる。上記2つに比べ、組織性が極めて弱い一方、最も広範な国際的ネットワークを有する。

これら3つの運動は、ある程度の組織性を持った集団と言える。特に、ダールル・アルカムは加入権などの社会学的な意味で、集団としての教団的性格が強い。しかし、いずれの場合も、組織としての活動の範疇を超えて、広くマレーシア社会にイスラームの復興を働きかけるオピニオン・リーダー的な特徴を色濃く示しており、教団というよりも思想運動ととらえる方が適切であると考えられる。

- 12) マレー青年連盟は、1938年に、イブラヒム・ヤーコブ (Ibrahim Yaacob) らを中心に結成されたマレー民族主義的政党である。この連盟は、マレー人の経済・社会生活の改善と共に、革命による植民地勢力からの独立と、インドネシアとマラヤの合体などをスローガンに掲げて、民族主義運動を展開していた。また、従来の価値観や社会的慣習を根本から否定していた点で極めて急進的な傾向を持っていた。1942年、日本軍統治下でその活動は禁止された。
- 13) この著作は、1981年にスランゴール州宗教会議が異端のファトワーを出し、発行禁止処分となった。
- 14) 伝統的なマレー呪術は、歴史的にアニミズムやイスラーム神秘主義(Sufism)などが習合したもので、一般に*Ilmu Jampi* (呪文の知恵) と呼ばれる。中でも、クラマツト(精霊)信仰や聖地信仰は広くマレー世界で知られている。しかし、現代では、イスラーム復興運動の浸透と共に、マレー呪術もイスラーム化しており、非イスラーム的要素は急速に減じている。マレー社会では、伝統的に呪術を操る人物*Bomoh*は精神的な指導者であることが多く、畏敬の対象であった。
- 15) ダールル・アルカムの思想体系、指導者ウスタス・アシャアリの教えにも、同様のメシア降臨の救済論が含まれていた。ダールル・アルカムが1995年に非合法化された際には、こうしたメシア思想がその理由の1つに挙げられていた。
- 16) 「アッラー以外にカミはなく、ムハンマドはカミの使徒である」と告白することで、イスラームにおける信仰の根幹をなすものである。
- 17) 第1章開扉は、全7節からなる短い章ではあるが、イスラームの思想の全てが盛り込まれており、クラーンの中でも最も重要な章句であると言われる。礼拝時には必ずこの章句を最初に誦しなければならない。
- 18) カリーファとは、アラビア語で、「代理者」の意。預言者ムハンマドの代理者として、政教一致の宗教的共同体の頂点にたつ人物である。すなわち、カリーファの地位は、ムスリム共同体においてムハンマドの地位から預言者性を減じたものである。しかし、世俗化に伴い政教一致の理念が崩れる過程で、カリフに対してスルターンが世俗の長、為政者として登場した。多くの復興運動において、スルターンは宗教理念に基づく理想的統治者とは認められていない。
- 19) 稲作補助金制度は、新経済政策の下で農民の所得向上を目的に1979/80年度より施行された。肥料補助金と米価補助金からなる。前者は、奨励農法の施肥量を各戸に無償で供与するものであり、後者稲粒1ピクル当たりの政府買い入れ価格に10リングットの補助金を上乗せ支給するものである。
- 20) カフィール(異端者)とは、アラビア語の原義で、「覆うこと」を意味する。この語は、通常、非ムスリムに対して用いられるが、厳密には、次の4つに分類される。すなわち、1. 神の存在を認めず、証言しようとしぬ者、2. 神の存在は認めるが、言葉によりそれを証言しない者、3. 神を認め、証言するが、嫉みや憎しみから不信心である者、4. 公に証言するが、心の中では神を認めていない者(偽善者)である。

- 21) 異端視運動の中では、しばしばカフィール（異端者）と同様のコンテキストで、*munafik*という語が用いられる。*munafik*とは「偽善者」を意味し、前出注20「カフィールの分類」の4に当たる。両者はほぼ同義で用いられているが、カフィールがイスラームの信仰を全く持たない異教徒という強い否定のニュアンスを含むのに対して、*munafik*はマレー社会内のムスリム同胞に向けた批判、すなわち表面上はムスリムでありながら信仰心を持たない「不信心な者」として区別されていると言える。
- 22) ポンドットとは、マレー語で「小屋」の意。イスラームの知識に通じた人（導師）のもとに集まった生徒たちが、粗末な小屋を建てて自然に出来上がった、マレーの伝統的な寄宿学校である。イスラームにおける宗教教育では、制度的な学校が存在する一方で、家庭や地域社会のインフォーマルな機会を非常に重要視する。そのため、マレー社会では、メッカ巡礼を果たしてハジと呼ばれる人や宗教学校で学んだ経験を持つ人（ウスタズ）など、イスラームに積極的な人たちは、尊敬の対象になり、共同体内での宗教教育の主導的な立場を占めている。
- 23) 先述の通り、イスラーム行政権は原則として州政府にある。従って、原則として州の宗教局が、州内のイスラーム結社の活動を監督・調査・指導する立場にある。しかし、現実には十分に組織的な調査が実施されているわけではなく、過激で狂信的思想の流布に関わったり、非合法活動に従事するといった切迫した危険がない限り、調査の対象となることはない。例えば、私が調査したクダ州の場合、1980年代を通じて州宗教局もしくは警察の捜査対象となり、結果として異端宣告を受けるような結社は、ムマリ事件を除き、たった5ケースしか存在せず、それら以外については、結社法に定められた登録内容以上の詳細を把握していない。
- 24) アフマディーア派は、19世紀末にインド・パンジャブ地方で興った宗派で、現在のパキスタンに多数の信者を有す。この派の教えは、イエスの解釈でイスラームと異なり、一般に異端とされている。その教えに拠ると、十字架にかけられたイエスは再生し、カシュミール地方に現れ、120歳で死んだとされる。創始者ミルザー・アフマドは、マフディーを自称し、イエスとムハンマドの生き返りであり、クリシュナの化身であると見なされた
- 25) 民族間の緊張について1987年、非マレー系野党DAPは、政府の汚職問題に始まり、8月にはマラヤ大学で選択科目問題に関連して非マレー系学生の非合法集会を組織し、これに対してマレー系も応戦した。さらに、マレー対非マレーの緊張は、10月に華人学校長問題で一層高まった。結局、政府のISA発動により、政府に批判的な政党幹部や宗教関係者、教育者、マスコミら多数の逮捕者を出した。
- 26) 民族暴動後に登場した第二次マレーシア五ヶ年計画（1971～75年）に始まる新経済政策（*New Economic Policy*）の別称。この政策の目標は、1990年まで20年間で「貧困の解消」と「社会構造の再編」を達成することだった。その結果、民族間の格差を縮める目的で、各方面でマレー系のブミプトラ（土地っ子、すなわち先住民）を保護・優先するというアフターアティブ政策が取られた。2001年より、新経済政策に代わる「Vision 2020」と呼ばれる新政策（2020年を目標に先進工業国化するというもの）が導入されたが、現在の政策にもブミプトラ優遇的な性格は残っている。